

2 男 3 女奮闘記

中国・北京日本人学校（2013-2015 派遣）

山口市立大歳小学校 三輪 一郎

1 はじめに

「空が青い…」

帰国翌日（帰国は夜だったので）の東京の青空を見た感動は今でも忘れられない。故郷・山口に戻って見た青空は尚更であった。3年経った現在、風の便りでは国家を挙げての環境対策が功を奏して深刻だった大気汚染もかなり改善されているという話も聞く。

しかし、自分が赴任する前年度には、在中国日本国大使館前を中心とした反日デモ活動、鳥インフルエンザ、そしてPM2.5で真っ白に霞んだ北京市内の様子が幾度となく国内のメディアから流れていた。北京行きを友人たちに告げても、お世辞にも「遊びに行くね」と言ってくれたのはほぼ皆無だった(笑)。

赴任当初は初めての海外生活ですべてが不安だったこともあり、却ってあれこれ考える余裕もなく赴任できたのかもしれない。だが、自ら在外派遣を志願した自分とはかく、帯同してくれた妻と3人の子どもたちは不安で仕方なかったことであろう。勤務に関しては、乱暴な言い方をすれば日本人学校は日本語・日本文化の圏内であり、それほど不自由を感じることもなかった。寧ろ、現地の人々や文化を直接肌で感じ、突発的な問題などにも対応するような経験を重ねてきたのは、家族の方だったのかもしれない。今回は、日本人学校での勤務とともに家族にとっての海外生活についても視点をあてながら、当時を振り返ってみたい。



某日の大気汚染指数

2 海外で生活するという事

赴任にあたっては、文科省による事前研修の他に、日本人学校から「派遣教員赴任の手引き（以下：手引き）」という小冊子が送られてきて、それを基に赴任の準備を始めることになる。隣接する中国だが、学校で学んだ歴史的事実や様々なメディアから配信される観光情報についてある程度は知っていても、いざ生活するとなると手引きを読めば読むほど疑問や不安が生じ、途方に暮れてしまうのだった。

(1) 年齢別の反応

赴任当時、子どもたちの学齢は新年長，新小1，新小5であった。国内のメディアからは中国に関する負の情報が頻繁に取り上げられていたことに心配していたが、幸いにも我が子たちの耳にはそれほど入ってはいなかったようだ。国内での転勤と同じように新しい学校、新しい友だちに対する期待と不安が入り混じっているようであった。

妻も北京行きを告げられたときは一瞬言葉に詰まっていたようだが、それからは自分なりにインターネットで情報を収集したり、手引きと首っ引きで移住の準備を進めたりすることで、自分自身を落ち着かせ、前へ進もうとしているようだった。

しかし、自分の両親など年配の世代になると、メディアからの情報をそのまま受けとめているからなのか、実際に赴任する自分たち以上に不安や疑問が膨らんでいるようだった。しかも心配の対象は孫のようで、普段は穏やかで理解のある義母までが就学前の孫が帯同することには難色を示し、説得に苦心する場面もあった。

(2) 携行品ってどこまで？

手引きには、前年度までに派遣された同僚教員の体験も交えて、当時の北京市の生活事情や携行品などが思いの外、事細かに記載されている。しかし、その文末には、このような一文が添えられている。

【好みや値段にこだわらなければ、こちらですべて揃えることができます。】

妻と頭を悩ませた結果、贅沢や選り好みをするわけではないが、小さな子どものことも考え、以下のようなものを準備することとした。

①健康面

鳥インフルエンザや大気汚染の情報が殊更に耳に入ってくるので、マスクは大人用と子ども用、3年間分を見越してネット通販で大量に購入した。当時は現在ほどPM2.5対応のものが出回っていなかった。また、水道水が飲料用ではないということで、歯磨き粉や食品用洗剤も購入した。日本でのこれまでの生活との違いを強く感じた一コマだった。さらに、在外で医療施設を利用してもキャッシュレスで対応できるような医療保険にも加入したが、家族5人で3年間分となると軽自動車を購入できるほどの金額になった。

②生活面

赴任時に持ち込む荷物は「手荷物」と「船便」に分けられる。手荷物は大きな荷物も持ち運べるが検閲の関係で到着まで北京でも1カ月はかかるという。地図で眺める以上に北京は遠いらしい。赴任後1カ月の生活をシュミレートし当座の必需品のみ手荷物として機内に持ち込むこととした。しかし、ほぼ学齢期とはいえ子どもたちの生活・遊びを考えると、どうしても荷物の中身は子ども中心で揃えることになった。また、赴任の3年間で子どもたちの入学・卒業があるので、それらを見越した準備も必要だった。結果、手荷物は5人家族の機内持ち込み可能最大限の段ボール箱（十数箱）になった。

3 肌で感じる「中国」

当たり前なことだが、着任当初は仕事面だけでなく生活面でも戸惑うことばかり。同僚教員が家族ぐるみで生活の支援までしていただくもののそれも4月末までで、1カ月を過ぎる頃には自分たちだけで生活を踏み出すことになる。平日は勤務、休日は生活面での立ち上げ…と、着任してからの1カ月は、目の回るような日々の連続だった。先輩教員も「労働節（4月末頃の3連休：在外では現地の祝日に準ずる）をめざしてがんばりましょうね。」と励ましてくれた。

5月に入り、ようやく自分たちで生活を始めるようになると、いろいろなものが見えてきた。

(1) お客様の自己管理で

①商品の確かめ

先輩教員に付き添っていただき、電器店でドライヤーを購入しようとしたときである。商品の梱包されている箱を指さし、代金を払おうとする私を先輩教員が制し、店員に「试试吗（シーシーマ：試してもよいか）？」と告げた。日本であれば怪訝な顔をされそうな場面であるが、店員は慣れた手つきで箱から商品を取り出し、電源に繋いできちんと作動することを見せてくれた。また、市場で腕時計を購入した際には、購入した日のうちで止まってしまったのでその市場に持ち込むと、レシートなどをこちらが持ち合わせてないにも拘らず、止まった時計を暫く眺めると何も言わずに店の奥から同じ商品を持ち出し、そのまま交換してくれたこともあった。商品を購入する前に動作確認をするのは日常的な行為であると同時に、製品に対して販売者も購買者も絶対の信頼を寄せているわけではなさそうだ。

②小皿は先ず拭いてから

外国人や富裕層が利用するようなレストランから庶民行きつけの食堂までテーブルの上に小皿とともにペーパーナプキンが置いてある。ここまでは日本でも目にする風景なのだが、こちらでは席に着いて注文を終えると食事が来るまでに皆が小皿をペーパーナプキンで拭き始める。見た目はそれほど汚れているようには見えないのだが、我々外国人だけでなく現地の方たちもそうするのが習慣のようである。



③柵の無い観光施設

北京市内にも万里の長城、天壇公園などの世界遺産をはじめとした歴史的な建造物が残されている。北京日本人学校では小・中学部が合同でこれらの世界遺産での全校遠足を実施するのが一つのアピールポイントであり、この行事を通じて異学年の絆を深めていたのだが、同行する教員がヒヤッとする場面がある。それは切り立った階段や展望台に手摺りはあっても落下防止の柵が設置されていない箇所が多いのである。中国では子どもがとても大事にされており、小さな子どもは保護者が背負うか、若しくは手をしっかり繋いでいることが多い。独りで歩き回る子どもはあまり見かけないが、蛮勇を奮うかの如く身を乗り出して写真撮影をしている若者はどこにでもいる。歴史的な観光地から工事現場にいたるまで少しでも危険と思われる箇所には柵が張りめぐらされているのが日常の我々には違和感をもつ場面である。



最東端の長城（秦皇島）は思わず足が竦む

(2) 深刻な経済格差

「北京の街並み」というと、皆さんはどのような風景を思い浮かべられるだろうか。毛沢東主席の写真が掲げられている故宮、霞んだビル街の谷間で身動きがとれなくなっている自動車の群れ、…。

今や強力な政治力・経済力を有し、人口約14億人に迫ろうとしている巨大国家の首都では、今もなお至る処で開発が進み、その勢いは止む気配がない。大使館区や商業区では、外国人に混じって20代にしか見えない現地の若者が高級外車を乗り回している。また、さまざまな国の人たちが集まっているだけに、海外の有名ブランド店、各国の料理店も数多く見られる。

一方、繁華街を少し外れると「胡同（フートン）」と呼ばれる、うら寂しい通りを見ることができる。一部は観光名所として成り立っており伝統的な家屋群といえなくもないが、多くは共同トイレ、解体若しくは改修の途中で放置されたままの家、など、生活上の課題が目に見えるようである。



北京日本人学校前に停まっているフェラーリ（手前）とポルシェ（右奥）





さらに、中心地から車で1時間ばかり離れると、広大ではあるがお世辞にも肥沃とはいえない農地と、それらの管理者が住んでいるであろう「住居」が見られる。「住居」と書いたが、我々の目から見ると「農機具小屋」に近いかもしれない。そして、彼らの中には職を求め、中心街へと集まっていくが夢破れて物乞いとして生活している者も少なくない

と聞く。実際に、自分も街中でさまざまな物乞いを見かけた経験がある。

北京日本人学校で働く現地人スタッフや3年間で親交を結ぶことができた現地の友人たちに話を聞く限りでは、こうした経済的弱者への行政による支援はあまり期待できないそうである。世界と対等となるべく、海外の新しいものを積極的に取り入れる反面、自国本来の文化や社会福祉を軽視するかの如き世情は、かつて明治時代の日本でも見られた「文明開化」を想起してしまうのは自分だけであろうか。

(3) 家族それぞれの立場から

①教育面での交流

北京日本人学校では、これまでも現地の私立学校や公立学校、国際学校などと交流を進めてきた。国際学校との交流は「国際交流ドッジボール大会（日・独・仏）」や互いの学校視察などで続いていたが、「国際交流弁論大会（日・中）」や現地校との交流に関しては2012年の反日活動の影響で一時中断を余儀なくされた。しかし、それはあくまで政治レベルの決定事項であり、当の学校現場では何とか交流を続けていこうと模索していた。そして、自分の赴任3年目（2015年）にはこれまでの現地校との交流が復活ただけでなく、現地校から北京日本人学校への視察であったり、現地の師範大学日本語学科の学生を教育実習生として受け入れたりすることもできた。



現地大学生による教育実習

それまでの自分は、中国国民の反日思想の根幹の一つには幼い頃からの反日教育が影響していると勝手に思っていた。しかし、これらの交流を通して感じたことは、これまでの考えをすべて否定することはできないかもしれないが、中国の教育者たちも日本の教育の良い点は素直に認めており、日本の教育に興味を抱いているということだった。当然、我々の方からも中国の教育に対して学ぶべき点は多々あるし、よいと思ったものからは積極的に学ぼうとする中国の姿勢は是非見習わなければならないと強く思った。

②生活面での交流

日本人学校は日本語・日本文化の圏内であり、現地人スタッフも日本語が通じるか、若しくは日本語やこちらのたどたどしい中国語を理解してくれようとしていた。しかし、職場を出れば、交通機関の利用から買い物など、あらゆる面で現地の人々とコミュニケーションをとらなくては生活がままならない。

先ず、「英語を少しかじっていれば何とかなる」という自分の中の常識が崩れ落ちた。外国人が出入りするような施設ならばともかく、現地のスーパーやタクシーの運転手には英語がほぼ通じない。習いたての自分の中国語でも怪訝な顔をされることは日常茶飯事だった。そのような中で、日常生活を営むために頻りに現地の人々と向き合っていた妻に、当時の様子を振り返ってもらった。

地元の人たちとのかかわりで今でも真っ先に思い浮かぶのは、食材の買い物です。日系のスーパーがないわけではありませんでした。歩いて行ける範囲で、しかも値段が安いということで野菜の買い出しは地元の市場へ行くようになりました。

最初に行き始めた市場は、日本では経験したことのない量り売りでした。陳列台に山盛りに置いてある野菜の向こうには、おばちゃんたちが目の前の客を気にするでもなく携帯電話を触りながら座っています。客である私たちは、沢山の野菜の中から、自分の目を見て、自分の手で触ってみて、納得したものを購入していきます。



きれいに洗浄してパック詰めされている野菜をスーパーで購入していた私は、商品を自由に触って購入することにはじめは馴染めませんでした。しかも、中にはこれまで見たこともないような野菜もならべられていて、暫くはジャガイモ、ニンジン、トマトなど日本でも身近な野菜のみを少量購入しては帰っていました。

しかし、2、3カ月もしてくると市場の中でも行きつけの店とおばちゃんが決まり、買い物をした後にはよく香菜（シャンツァイ：パクチー）をおまけで一掴みつけてくれるようにもなりました。さらに、拙い中国語で調理の仕方を聞くと、隣で商売をしているおばちゃんも加わって、野菜の切り方から炒めるか煮るかといった調理方法まで身振り手振りで詳しく教えてくれるようになってきました。おばちゃんはこちらから歩み寄ればお節介なほど親切で優しいというのは、日本も中国も大概同じだなと感じました。


赴任1年目が終わる頃には、自分よりも妻の方が堂々と現地の人々と接し、流暢に喋ることは難しくても相手の言っている内容を理解することができるようになってきた。『習うより慣れろ』である。

③子どもたちの体感した「中国」

子どもたちは、当然のことながら自分と同じ学校へ通うこととなる。毎日が授業参観日のようなもので、親子共々軽いストレスではあったと思う。大人が感じる「外国」とはまた違った視点で子どもたちは3年間を過ごしてきた。ここで、3人に、当時の思い出を振り返ってもらった。

長女 (小五〜中一)	一番驚いたこと	中国行きを聞いた時期と反日デモや大気汚染がニュースで頻繁に流れていた時期が同じで、石などを投げられないように日本人ということを隠さなくてはいけないと思っていました。でも、住んでみたら皆親切だったし、日本人であることをカミングアウトしても嫌な顔をされるどころか、日本語で「ありがとう」という言葉も返ってきたのは嬉しかったです。
	一番心に残っていること	学年的に学校行事で中国のいろいろなところへ行くことが多く、そのたびに中国の長い歴史の素晴らしさを目の当たりにしてきました。同じアジアでも日本とはまた違う自然や建造物の数々は、教科書には載っていない沢山のことを私に教えてくれました。世界3大美食国家ということもあり料理もとても美味しく、行く先々の小さな楽しみでもありました。私にとって本当によい時期に中国に行ったと思います。

次女 (小一 〜小三)	一番驚いたこと	北京ではあまり雨が降らないと聞いていて、中国の人たちは雨が降ってもすぐに傘をささずに木の下で雨宿りをしているのをよく見ました。でも、一度だけ雹も混じった大雨が降って、アスファルトの道も水で溢れかえったときがありました。初めてのことで驚いたけど、少しワクワクしました。家に着いたときにはおへそから下がびしょびしょでした。
	一番心に残っていること	国際交流ドッジボール大会です。日本ではあまり外国の人と交流できなかったのも、とても楽しかったです。応援しているときもいろいろな国の言葉で「がんばれ！」が飛び交っていました。戦っているときも言葉は分からなかったけどなぜか気持ちがつながっているように感じました。プレゼント交換をしたときにアルファベットの書いてあるしおりをもらいました。低学年とは思えないような上手な色の塗り方で、見習いたいなと思いました。

長男 (年長 〜小二)	一番驚いたこと	北京に行ってから、空気が今までと違うことにびっくりしました。外に遊びに行こうと思っても、空が灰色で何か変なおいがる日もありました。マスクのせいで息もしにくかったです。 北京の幼稚園（現地）で驚いたことは、中国人のクラスは夜まで勉強をしていたことです。
	一番心に残っていること	(近所の)川は茶色や緑色になるときもあってあまりきれいではなかったけど、冬になるとスケートをすることができました。ぼくは、北京で初めてスケートをしました。 万里の長城に上ったとき、とても長かったです。下りるときはコースターみたいなもので滑り降りたのが楽しかったです。 

4 おわりに

今もなお発展を続けている中国。現在、耳にしている大きな変化はカード決済の普及らしいが、首都たる北京の加速度は尚更であろう。それを如実に感じたのは、実は北京日本人学校の内規だった。派遣前の政情不安、発展途上の経済などの理由から、派遣教員やその家族の生活とその安全を守るために、「（食中毒への考慮から）職場で弁当などを注文する際は、全教員数の半数以下までとする」「（校外でのトラブル回避の配慮から）派遣教員とその家族は、習い事やサークル活動は慎む」といった事細かな内規が存在していた。しかし、派遣教員も目まぐるしく変わっていくこともあろうが、それらが少しずつ修正・撤廃されていった背景には、北京が外国人にとっても住みやすい都市になったということであろう。おかげで、より“素”に近い北京を肌で感じる機会も増えた。驚くことの連続ではあったが、自分だけでなく家族一人ひとりがそれぞれの立場で苦労しながらも、家族全員で支え合って乗り切ることができた。帰国後3年が経ち、これまで馴染んでいた日本の文化・生活に慣れた今でも、「また北京を訪れてみたい」と思えることは幸せなのかもしれない。

北京の世界遺産としても有名な「万里の長城」。それは、一見ならかな起伏を思

わせるが、城内の石段は高さも千差万別、傾斜は足が震えるような急角度の箇所も見られる。それでも一歩ずつ歩みを進め、高台から見下ろした景色と爽やかな青空は今でも鮮明に思い出すことができる。遠目から眺めたり他者からの伝聞だけで納得したりするのではなく、小さなことからでも自分の手足を使って一つずつ取り組んでいくことが大事であると教えられたような、在外でなくては得難い貴重な経験を象徴する一コマであった。

〈資料 在外時に原籍校などに送った現地便り〉

<p style="text-align: center;">A Kaihuai Beijing 啊，开怀 北京 さあ，北京と仲よくなろう</p>		
2013年	2014年	2015年
vol. 1 衣・食・住	vol. 5 1冊の本との出会い	vol. 18 カササギの巣作り 現地校(私立)見学①
vol. 2 運動会① 中秋節①	スケート体験①	vol. 19 校務分掌 サークル活動
vol. 3 歓送迎式 日壇公園	vol. 6 国際交流ドッジボール大会 春節①	vol. 20 両親来中 日中観光交流
vol. 4 タクシー ハロウィーン	vol. 7 スケート体験② 春節②	vol. 21 昼食 現地校交流(教員)
	vol. 8 馬頭琴鑑賞会 歓送式	vol. 22 理事長講話 現地校交流②
	vol. 9 全校遠足 端午節	vol. 23 大使館領事部長講話 ヴァーチャル紫禁城見学
	vol. 10 餃子作り 大使館バザー	vol. 24 運動会③ 世界陸上日本代表選手団来校
	vol. 11 現地校交流①	vol. 25 日本人会祭り 『小さな留学生』
	vol. 12 運動会② 中秋節②	vol. 26 現地校(私立)見学② 教育実習
	vol. 13 国慶節 保護者・日本人会参観	vol. 27 国際交流弁論大会 現地校(私立)見学③
	vol. 14 中国の餃子 雑技団	vol. 28 中国自転車事情
	vol. 15 年末 防寒対策	vol. 29 偽札
	vol. 16 冬景色 国際学校見学	
	vol. 17 春節③ 魯迅博物館	

A Kaihuai Beijing 啊，开怀 北京 さあ，北京と仲よくなろう



平成 27 年 10 月号

日本人会祭り

この時期になると、子どもたちが楽しみにしている行事の一つが「北京日本人会日中交流チャリティー秋祭り（通称：日本人会祭り）」です。北京日本人会が母体となってさまざまな屋台や各業種（医療機関、航空会社 など）のブース、そして、都道府県対抗クイズ大会や大抽選会などのイベントというように、子どもたちだけでなく大人までも楽しめる企画が盛り沢山です。毎年、その会場が本校になっているわけですが、私も在中 3 年目にして初めて参加しました。在外にいながらまさに日本のお祭りのような雰囲気、子どもたちも金券を握りしめてどのブースへ行こうかとウキウキしています。私も廻ってみました。こんなお店も参加しているのかと、子どもとはまた違った目線で楽しむことができました。



北京生活が長い方とお話しした際に、今でこそ我々外国人のここ北京での生活自由度も随分改善されたと聞きますが、北京日本人会発足当時はいろいろな不便さを、業種を超えて北京で暮らす皆さんで支え合ってこられたそうです。現在は当会にわざわざ入会しなくても十分に生活できることから、会員数も減少しているそうですが、日中友好親善、そして、日本人同士の交流について考えるよい機会だと思いました。

「小さな留学生」に会って

2000 年に日中で放映され大反響を呼んだ「小さな留学生」をご存知でしょうか。中国から日本の小学校に編入してきた張素さんの学校生活を追ったものですが、今回、ある交流会でその VTR を視聴するとともに、現在の張素さんにお話を聞かせていただく機会を得ました。文化の異なる環境の中でひたむきにがんばる幼き日の張さんにも心を打たれましたが、そうした日本での子ども時代を過ごしてきた張さんの心境などをお聞きすることができたのは非常に参考になりました。その中でも印象に残ったのは、「誤解があるからこそ面白い」というお言葉です。同じ文化圏の人同士でさえ誤解は生じます。ましてや異なる文化圏ではなおさらでしょう。しかし、そこで相手のすべてを見切ったかのように断罪してしまっているのは我々大人ではなかったでしょうか。「誤解」を楽しむ心の余裕を育てるために異文化理解について考えていきたいです。



在中国日本国大使館附属北京日本人学校 教諭 三輪 一郎 bqv04776@gmail.com

